

読書運 ～第40号～ 動通信

【特集】

1. 新年度テーマについて
2. スポーツと文学

【紹介】 私の好きな児童文学・第1回

【お知らせ】 イベント、募集、他

【発行】 フェリス女学院大学附属図書館

読書運動プロジェクト 2007.4.30

はじめに

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。希望にあふれて入学された皆さんを、フェリスは全力で応援します。自分から問題点を探し、調査することが要求される大学での学問は、図書館なしでは進みません。調べものに気分転換に、是非図書館を利用してください。大学図書館は通常、研究資料中心の構成ですが、本学では読書推進のために「私たちの今を読む」という文庫本を中心に現代作家の小説を集めたコーナーがあります。このコーナーは文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択された「読書運動プロジェクト」の書架でもあります。今年度で活動開始五周年を迎える当プロジェクトでは、あさのあつこ著『バッテリー』を中心に、「児童文学の現在」大人と子ども・消えるボーダーライン」をテーマに活動しています。毎週木曜日の昼休みに緑園図書館四階のミーティングルームで打ち合わせをしていますので、是非ご参加ください。

(図書館事務室)

特集一 新年度テーマについて

フェリスの『へー冊の本』二〇〇七 あさのあつこ著『バッテリー』
テーマ「児童文学の現在」大人と子ども・消えるボーダーライン」

大学生の読書運動でなぜ児童文学を取り上げるのか、そう思った方もきっと多いことでしょう。が、魅力的な児童文学は大人の鑑賞に耐え得るものです。『ハリーポッター』シリーズのことを考えてみてください。一連の作品はまぎれもない児童文学ですが、本国のイギリスのみならず、世界中の老若男女を虜にしました。また、最近日本では、児童文学の作者が優れた一般向けの小説を発表することが多くなっています。二〇〇六年度の直木賞は児童文学の書き手である森絵都でした。同じく直木賞作家の三浦しをんはライトノベルや軽いエッセイと一般向けの小説を行き来する作家です。その他、村山由佳、乙一、小野不由美、桜庭一樹など、当館での貸出ランキング上位常連の作家は、やはりヤングアダルト向けの小説も一般向けの小説も書いています。今、児童文学と一般向けの小説の間に何が起きているのか、メディアミックスが盛んに行われている児童書、ライトノベルの世界に、さまざまな観点からも光を当てていきます。

(図書館事務室)

メンバー募集

読書運動プロジェクトでは常時メンバーを募集しています。『バッテリー』を読んだことがない人でも大丈夫！新しいジャンルへの第一歩を踏み出せること请け合いです。

毎週木曜日の昼休みに図書館四階の化粧室脇の部屋でミーティングを行なっていますので、興味がある方は是非一度遊びに来てください。(図書館事務室)

課題図書特価販売中！

今年の二冊の本である『バッテリー』と『ロビン(上下)』を一冊二〇〇円で販売します。

証紙を買って、緑園・山手函図書館カウンターにお持ちください。(図書館事務室)

今年度の予定	
4月	学内サークル紹介、新入生学外オリエンテーション 4/26(木)第1回プレ読書会「私の好きな児童文学」
5月	5/9(水)第1回映画会「タッチ」キダーホール 随想コンクール・読書週間ポスターコンクール募集(5/14~6/20) 第2回読書会
6月	読書週間ポスターコンクール応募作品展示会 第2回映画会「ウォーターボーイズ」、第3回読書会 創作コンクール募集開始(7/2~12/3)
7月	随想コンクール結果発表(7/11) 第3回映画会「テニスの王子様」、第4回読書会
10月	第5回読書会 11/3~4 大学祭 講演会・ウォークラリー
11月	第4回映画会「少林サッカー」、第6回読書会 12/8(土)シンポジウム・ポスターセッション
12月	第7回読書会
1月	音楽と朗読と講演会、創作コンクール発表(1/16)、第8回読書会

特集一 スポーツと文学

『ロビン(上下)』 森 絵都 著 角川書店

請求記号 RP二セ 資料番号 190440010-20 緑園二階

この物語は高飛び込みの世界と出会った坂井知希が、オリンピック選手として世界へ羽ばたくまでを描いたものです。しかも主人公ばかりでなく、そのライバル選手達の高飛び込みへの想い、成功と挫折、苦悩、友人とライバルという微妙な人間関係など、数々の想いにもスポットが当てられていて、少年達の心の内がとても魅力的に描かれています。

私は、主人公の知希と同じ年齢のころにこの作品に出会いました。そのためか、この本は私にとっては大変思い深い一冊です。

「高飛び込み」はオリンピック競技の中でも決して注目度が高いとはえませんが、二秒にも満たない空中演技を競う、とても緊張感あふれるスポーツです。この作品を読む前は、私は、高飛び込みがどういった競技かさえず、たまたまつけたテレビで競技の様子が放送されていて、輪郭のはっきりしない絵を見ているような気さえていました。が、一読以来、わざわざ新聞のテレビ欄を確認して高飛び込みの中継を見るほど、印象深いスポーツになったのです。それはまるで、ぼんやりとしか見えなかった世界が急に色を持ったような印象でした。この作品に出あわなければ、私はきっと高飛び込みの魅力も知らずに終わっていたことでしょう。人生の中で、それはほんの些細なことかもしれませんが、読書を通して新しいスポーツを知ったり、スポーツを通じて育まれた友情に共感したりすることも、出会いの一つのように私は感じます。是非多くの人にこの作品を読んで欲しいです。

(日本文学科三年 高松彩子)

* 『ロビン』は五月の読書会の課題図書です。五月(四日)木(昼休み緑園図

書館四階読書運動プロジェクトミーティングルームへご集合ください。誰で

も自由に参加できます。

(図書館)

『バッテリー』(一巻)あさの あつこ 著 角川書店

図書館カウンターにて一冊二〇〇円で販売中

まず、この本の作者、あさのあつこの子供の心理描写に感心しました。私は、常々子供の世界は、大人が思っている以上に複雑だと思っていました。それを私たちは大人と呼ばれはじめる頃から徐々に忘れていつているのではないかと考えるのです。

子どもには子どもの世界があります。そこは複雑で人間関係も大人社会と同様、あるいはそれ以上にシビアです。子どもはまだ一般社会との関わりが希薄な分、自己主張も強く、大人からすれば未熟とも見えます。でも実際は違つ。あさのあつこは、私たち大人が見落としているだけで、そこに確かに存在する子どもにしか見えない精神世界を見事に描写しています。

主人公の巧の自信にあふれた言動、しかしそれと裏腹な、まだまだもろい心のうち。この表現の妙が、この作品の核でないでしょうか。

巧を囲む登場人物もまた魅力的。巧とバッテリーを組む豪はもちろん、私の特筆したいのが、兄の巧にあこがれる青波のキャラクターです。幼く病弱な彼が、兄とは違った野球を模索する姿が健気で愛着がわきます。独特の方言もまた、彼の魅力をいっそう際立たせています。

巧の母の描写にもリアリティーがあります。思春期を迎えた、それでなくとも扱いにくい巧と、従順だが病弱な弟の青波。この二人の母としての面と、

転勤族の夫を持つ妻としての面。そして井岡洋三(巧・青波の祖父)の娘としての一面。この心理描写も読者を飽きさせません。

一巻は登場人物を紹介するのにページがさかれ、話の展開はゆっくりですが、二巻以降の巧と豪の活躍、青波の成長は目を見張るものがあります。完結の六巻まで、一気に読んでしまいたい気持ちを押さえるのが難しいような作品です。

(工書店 店長)

『風が強く吹いている』三浦しをん 著 新潮社

所感無し 発注中

私の母校は、新年の恒例行事である東京箱根間往復大学駅伝競走(箱根駅伝)に三九回出場しており、総合優勝一回、往路優勝三回、復路優勝一回の実績を持っている。ちょうど私の在学中に、陸上部駅伝チームが一八年ぶりに箱根駅伝本選出場をはたした。大会当日、一人暮らしをしているサークル仲間の部屋に押しかけ、テレビの前で皆で応援したことを懐かしく思い出す。卒業後、私は母校のスタッフになったが、そのころ初出場から六一年目にしてやっつと、しかも前年度途中棄権から予選会突破を経て、ついに初優勝したときの嬉しさは、今でも忘れられない。

三浦しをんの直木賞受賞第一作は、この箱根駅伝をテーマにしている。

ケガで一度は陸上競技を断念した主人公の清瀬灰二は、走るために生まれきたような感原走に出会うことによって、忘れかけていた走るこへの情熱を取り戻す。そんな彼らの情熱に押されるように、所属する陸上部は全員一丸となって箱根駅伝出場を目指すことになった。しかし、部員たちは全くの素人。ほとんど実現不可能とさえ思える夢に向かって、自分と仲間を信

じ、彼らは全力で走る。その姿は力強くひたむきだ。

三浦しをんの取材は綿密で、登場人物の内面の描写はみずみずしい。駅伝を見ていると、脱水症状や疲労骨折で棄権に追い込まれたり、繰上げスタートでタスキがつけられなくなったりと、視聴者の涙を誘うような場面が何度もある。が、本作の中にはそういったドラマチックな場面は出てこない。

三浦は言う。

「ハプニングで物語は盛り上がるかもしれないが、一所懸命走っている彼らにとつては盛り上がるどころではない。それよりも、彼らが走っているときに何を考え、何を感じているのか、それをこそ描きたいと思った」

作者の作品にかける情熱と作中人物の情熱がみごとにリンクして、読者をも熱くし、自然に涙がこみあげてくる。スポーツ小説にありがちな、泣かせようという作者の意図に、まんまと嵌ってしまつて号泣するようなくやしきはない。

灰二は走に言う。

「俺を駆り立て、新しい世界を見せてくれるのは、走、きみだけだ」

友に向けるにはいささか情熱的すぎるこの言葉も、この超ストレートな青春小説にあつては何の違和感もない。

私にとって大学時代をとも過ごした友人たちは、かけがえのない存在だ。一人一人が作品に取り組む文科系サークルに所属し、灰二と走と八人の仲間たちのように、全員一丸となって突き進むよつな日々ではなかったけれど、夢と友情をたよりに、それぞれがんばってきたことはかわらない。彼らの何人かは夢をかなえ、私は夢を捨てた。

三浦はこうも言う。

「才能がないならあきらめればいいのかも、夢が叶わなかったら人生は失敗だとも思わない。努力をつづけていけば、何らかの形で夢は実現する。それは当初の目標を達成することだけに限らず、自分が生きてきたことは無駄ではなかった、自分が愛したものは決して自分を裏切らなかつた、と思えた瞬間だ」

あきらめずがんばれば夢はかなうというメッセージは、表面だけ見れば陳腐で何の現実感も伴わないが、その意味が三浦の言うよつなことであれば、私もそこを目指してみたいと思う。

青春を遠くはなれた今でも、あこのころの仲間たちと箱根駅伝を見ることが私の一年は始まる。来年のことを言つと鬼が笑つかもしいれないが、三浦しをんのこの本を持つて、私はまた、仲間たちの待つ部屋へ行くだろう。そしてまた、形をかえた夢の話をするだろう。

(図書館 鈴木)

紹介 私の好きな児童文学 第一回

『怪人二十面相』 江戸川 乱歩 著 ポプラ社

横浜市立図書館・神奈川県立図書館 所蔵あり

子供のころ通っていた鍼灸院の待合室には、大量の本があった。戦争で失明されたのだというその老先生は、鍼の腕前も確かだったが、それ以上に博識で、痛くないとはわかつていても、身体に針を刺されることに怯えきっている七歳の私に、色々なことを話してくださつた。中でも出征先の南方の国の美しさ(つらい思いをされたらうに、どんなに人が親切で、自然が豊かで海や星雲がすばらしかつたかしか話されなかつた)と、これまでに読まれ

た本のおもしろさについてのお話は、私に恐怖を忘れさせ、空想の世界へ旅立たせるのに充分だった。

先生の蔵書には江戸川乱歩の本がたくさんあった。その中の、大人の蔵書としてはあまりふさわしくない、読み込まれてポロポロになった『少年探偵団』シリーズが、今回の「私の好きな児童文学」である。

乱歩のこの一連の作品は、周知のとおり子ども向けの娯楽作品である。美術品専門の怪人二十面相を、明智探偵と助手の小林少年率いる少年探偵団が追いかける、とても痛快な話だ。

シリーズ第一作目の『怪人二十面相』は一九三六年に『少年倶楽部』に掲載された。

舞台は関東大震災後の東京。変装の名人で、二〇の顔を持つと言われる盗賊二十面相が、国立博物館の美術品を盗むと予告してきた。名探偵一派と怪盗との勝負はいかに！

と概略を陳べるだけで、ワクワクするような冒険探偵小説であることがおわかりいただけると思う。子ども向けを意識したためだろう、ミステリー部分でのくだくだしい説明はない。簡潔かつ鋭い推理と心躍る活劇、先が読めそうで読めない展開に、私は名を呼ばれたことにすら気付かないほど夢中になった。また、易しい言葉で書かれてはいても、乱歩独特の、夏の都会の夜風に吹かれたような、耽美的でどこか退廃的な雰囲気などは健在で、情景が目の前に立ち上がってくるような描写力とあいまって、大人の読者を魅了するに余りある。

同シリーズ全三作中には、「ありえね〜！（少林サッカー）」と叫びた

くなるような、突飛な扮装やら仕掛けやらで笑わせてくれる、さしもの乱歩先生もスランプだったのだろうかと疑いたくなるような、ご都合主義全開の喜劇になってしまっているものもある。が、二十面相の、自分だけの美術館を作るためという窃盗の目的、金銭に対する欲求の少なさ、残酷なことに嫌悪を示し、戦争を起し多くの人を殺した連中が自由の身であることに憤る反戦精神など、乱歩の人柄が反映された、全体的に気持ちのいいピカレスクロマンである。

一八九四年生まれの彼は、早稲田大学卒業後、一九二三年に名作『二銭銅貨』でデビューした。代表作は『心理試験』『パノラマ島奇談』『陰獣』『幻影城』ほか多数あり、戦後は、評論による啓蒙や日本推理作家協会の設立に携わるなど、多大な業績を残した。また新人発掘にも熱心で、一九五四年には推理作家の登竜門である江戸川乱歩賞を制定、彼に才能を見出された作家は少なくないという。また、没後四二年経ってもさまざまな版元から全集や文庫本が出版されたり、舞台化、映画化されたり、果ては同人誌が作られたりと、いまだに多くのファンをひきつけている作家である。

私は、いつのまにか鍼灸院に通うことが楽しみになっていた。そこで治療を受けている人はほとんどが大人だったから、『怪人二十面相』は、こっそり挟んだ菜の位置もそのままに私を待っていてくれたし、老先生の話はいつも面白かった。

『うっし世はゆめよめるの夢』と『まじ』ってね、乱歩は言っているから、老先生は教えてくれた。

そのころの私には意味などわからなかったが、どこか淫靡で呪文めいたそ

の響きは強く印象に残った。

私はそれまで以上に読書に耽溺し、読んだ本のことを、いそいそと先生に話すようになった。一度と活字を追うことのできない先生は、それをどんなお気持ちで聞かれたらう。「うつし世はゆめよるの夢こそまこと」と言われたときの先生のお気持ちはいかにばかりだったろう！しかも、健康になってきた私は、何の挨拶もせず通院を止めてしまったのだった。

一九九八年にポプラ社から『新訂少年探偵江戸川乱歩』全二六巻が出版され、私は全巻揃いを購入した。イラストも書体も、仮名遣いまで違つのに、この本を手にとると、ほの暗い鍼灸院の待合室と黄ばんだページ、それから午後の治療室の中、逆光に浮き上がる小柄な、しかし凜とした老先生のシルエットがあざやかによみがえる。だからいつでも、それを読み始める前には私は何度もまばたきをしてしまうのだ。

(図書館 鈴木)

お知らせ

二〇〇七年度読書推進ポスター標語コンクール作品募集

イラスト作成要項

読書推進をイメージした未発表のイラスト。ジャンル不問。A3サイズ用紙を縦に使用し、イラストの周囲に必要以上の余白をつけたり、画面に文字を入れないこと。ただしイラストの一部として文字を使用する場合は可。用紙 画材自由。イラストボード可。立体 半立体 写真不可。

標語作成要項

文字数自由。字体自由。(ワープロ、手書き、自作デザイン文字等)ただ

し著作権のあるものは不可。

ポスター作成要項

A3用紙に作成したイラストのカラーコピー(縮小可)を貼付し、余白に作成した標語を記入、または貼付、または印字する。

応募方法と提出先

B4サイズのイラスト原画一部およびA3サイズのポスター一部を緑園または山手図書館カウンターに提出。両方の裏面に応募用紙を必ず貼付すること。(応募用紙は緑園・山手両図書館カウンターで配布)

応募資格と〆切

本学学生・院生・科目等履修生。六月二〇日(火)一七時必着

審査と発表

応募作は全て図書館に展示します。応募作品は読書運動プロジェクトWebサイトおよび読書運動通信に掲載されます。応募者全員に一千円分の図書カードを進呈します。応募作は全て(社)読書推進運動協議会主催「二〇〇七・第六一回 読書週間ポスターイラスト募集！」に出品します。受賞者には(社)読書推進運動協議会規定の賞状と賞品が授与され、読書週間(二〇月二七日～二一月九日)に全国の図書館や書店に掲出されます。

* 参考(社)読書推進運動協議会 <http://www.dokusho.or.jp/>

本を読んで考えたこと随想コンクール作品募集

以下の参考図書の中から好きな一冊を選び、読んで考えたことを、あなたの言葉で綴ってください。上位入賞作品は読書運動Webサイトおよび読書運動通信に掲載されます。

参考図書

『下流志向』 内田樹 著

『「ニート」って言いな〜』 本田由紀 著

『多元化する「能力」と日本社会』 本田由紀 著

* 本は図書館カウンターで借りられます。貸出期間一週間・延長一回可

賞品(図書カード)

第一席：一万円(一名) / 第二席：五千円(一名) / 第三席：三千円(一名)

応募賞：一千円

応募〆切 二〇〇七年六月二日(金) 一七時 必着

提出場所 附属図書館緑園または山手図書館カウンター

発表 二〇〇七年七月一日(水) 附属図書館(緑園本館・山手分室)

授賞式 二〇〇七年七月二日(水) 一三時 附属図書館緑園本館館長室

応募資格 本学学生・院生・科目等履修生

問合せ先

附属図書館読書運動プロジェクト 電話 〇四五・八二・六九九

* 両コンクールともポスター、応募用紙をよく見てから応募してください。

読書会

五月の読書会

課題図書『ロベリ』

日時 二〇〇七年五月二四日(木) 昼休み

場所 緑園図書館 四階 読書運動プロジェクトミーティングルーム
当日この時間帯のみ昼食持込可。誰でも自由に参加できます。

おわび

五月九日(水) 一六時三〇分より開催の第一回映画上映会『タッチ』は、機材トラブルの為上映中止となりました。あらためて上映会を行いますので、是非ご参加ください。なお、六月の映画上映会は『ピンポン』『ウオーターボーイズ』の予定です。

おわりに

一年とは早いもので、また桜の季節が巡ってきました。唐代の詩人、劉希夷に『代悲白頭翁 白頭を悲しむ翁に代わりて』という七言古詩があります。「年年歳歳花相似 / 歳歳年年人不同 (年年歳歳花相似たり / 歳歳年年人同じからず)」という有名な句は、ご存知の方も多いと思います。大学に勤務しているとき、まさにこの句のとおりだと感じます。花の季節は巡ってきて、入学、進級、卒業と、人はどんどん入れ替わっていくのですから。

冒頭に記したとおり、読書運動は今年で五周年を迎えます。さまざまな企画で読書の浸透を図って来ましたが、今年度末には内外から専門家を招いて、その成果を発表するシンポジウムを行う予定です。月日はめぐり、人は代わっても、図書館が愛されつづけ、読書運動が受け継がれつづけていってほしいと思います。

(図書館事務室)